



Title	＜書評＞西村天囚と重建懷徳堂に関する研究の新生面を開いた好著：湯浅邦弘著『世界は縮まれりー西村天囚『欧米遊覧記』を読むー』
Author(s)	陶，徳民
Citation	懷徳堂研究. 2023, 14, p. 113-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評 西村天囚と重建懷徳堂に関する研究の新生面を開いた好著

— 湯浅邦弘著『世界は縮まれり—西村天囚『欧米遊覧記』を読む—

陶 徳民

ここ数年間、著者は西村天囚『欧米遊覧記』（朝日新聞合資会社、一九一〇年十月十月初版、同月二〇日再版、翌十一月第三版。以下「原書」と略称）に関するご論考を連続して発表しており、評者はそれから多くの有益な示唆を受けた。例えば、「西洋近代文明と向き合った漢学者・西村天囚の「世界一周会」参加」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第六〇号、二〇二〇年）、「西村天囚『欧米遊覧記』と御船綱手「欧山米水帖」——明治四十三年「世界一周会」の真実——」（同第六一号、二〇二二年）および「懷徳堂の復興と西村天囚——「世界一周会」の歴史的意義——」（『懷徳』第八九号、二〇二一年）などである。今年二月、これらの論考も生かされた、五百ページを越す好著『世界は縮まれり—西村天囚『欧米遊覧記』を読む—』（以下「本書」と略称）を頂戴し、その内容の充

実さと奥深さに感銘した。特に「天囚の専門とする伝統的な漢学と西洋近代文明とは一見遠い存在にも感じられる。しかし両者は確かに響き合い、天囚の心を強く動かして懷徳堂再建運動の大きな力になって行ったのである」という分析が腑に落ち、これにより西村天囚と重建懷徳堂の研究における新生面が開かれたのではないかと思つた。従つて、ここにおいて、本書の読後感、自分の欧米旅行経験および天囚の思想的性格と懷徳堂再興運動の文脈に対する認識の変遷と反省を披露し、大方の教示を仰ぎたいと考えている。

（一）目次から見る本書の構成と詳細

本書は原書にもとづき、朝日新聞社が組織した「第二



写真1 『世界は縮まれり』表紙

回世界一周会」(総勢五十七名が汽船と汽車を使った、一九一〇年四月六日横浜港出発、七月十八日敦賀港帰着という百四日間の世界大旅行)に関する紹介と分析である。ここにおいて、まず小見出しも含む詳細目次から本書内容の全体を観てみよう。

はじめに

西村天囚と世界一周会／明治時代の世界旅行／漢学の復興／時代を切り取ってみせる壮挙／新資料、新事実の発見／旅を追体験する楽しみ
本書の構成／注記

凡例

一、出版まで

今なぜ世界一周か／旅行の概要／旅行の特長は五点あ

り／確定した会員と特派員／延長された旅程百四日と代金二四五〇円

二、出航

世界は縮まれり／関西会員の神戸出航／伊勢湾へ／横浜港の壮観／登舷礼に送られて地洋丸出航／船内での夕食と服装／君子の礼節／船室の様子／船酔いと戦い／船中の書画会／無線電信／薄手のシャツでホノルルへ／「洋行」の準備はどこで／沢庵恋しき頃

三、ハワイ

見慣れぬ草木／奮闘する日本人移民／清国皇族濤貝勅との会見／五分演説会

四、サンフランシスコ

サンフランシスコ到着／検疫の滑稽／羨望のフェアモントホテル／自働車での市内見学

五、アメリカ大陸横断鉄道

朝日遊覧列車／大まかなのがアメリカ式／サクラメントの当て字／汽車の中での食事／ソルトレイクの由来／大陸横断鉄道に乗って／喧囂なるシカゴ市街／シカゴの上水道事情／ナイアガラの滝

六、アメリカ東海岸の諸都市

「知」の街ボストン／道徳性を反映する図書館の自由閲覧／プロビデンス号でニューヨークへ／アメリカの独立

とフィラデルフィア／首都ワシントンの風格／徳川公爵の国会訪問と「日米戦争」／タフト大統領との会見／初代大統領ワシントンの旧宅／偉人の晩年／ワシントン記念塔／ニューヨークの夜景／日本倶楽部での歓迎会／余念なく新聞を読む女性／交通ルールを守る人々／デパートの電動梯段／ハドソン川をくぐる河底鉄道／大阪にもほしい水上消防船

七、イギリス

バルチック号で大西洋を渡る／礼儀正しいロンドンのホテル／日英博覧会が静粛に開場／ロンドンにおける日本語表記／小さく美しい国／セントポール大聖堂での英雄顕彰／ロンドン郊外と大英博物館／裸体像と平和観／国会議事堂／ウェストミンスター寺院／ケンブリッジ大学の大学院生／歴史と伝統のイートン校／英米両国の比較

八、フランス

パリのカフェテラス／ヴェルサイユ宮殿／ヴェルサイユの噴水と東本願寺の大噴水／ルーヴル美術館は崑崙の宝玉／リュクサンブール美術館／グランドオペラの品評会／ブリュッセルの印象

九、イタリア

パンと珈琲の朝食／ジェノヴァ市／美術嗜好のローマ／ローマは欧州文明の源／ローマと東洋の文化交流／コロ

シアムの盛衰／文明の極みは衰弱／カラカラの浴場／美しき市街の光景／サン・ピエトロ大聖堂／ローマの本願寺と我が法隆寺／仏教の従弟／バチカン宮殿の神品／法王の威勢／ローマは寺の都／天正遣欧使節の壁画／伊達政宗の書簡／東西交流のはじめ／天因の郷里種子島と鉄砲伝来／鎖国政策の評価／バチカン図書館の古写本／ナポリとヴェスヴィオ火山／正直な給仕長／ヴェニスのサンマルコ寺院／ゴンドラ船と水上交通／ヴェニスの穏やかな風俗／サンタマリア寺院の古碑／碑版発見の喜び／ミラノは小巴里

十、スイス

アルプス山中の景観と螺旋状の鉄道／岩壁の獅子とスイス親衛隊

十一、ドイツ

活版印刷の祖グーテンベルク／博覧会に見るイタリアとドイツ／ベルリンの公園に見るドイツの国民性／粉屋の風車と人権問題／ベルリンの下水事情／孤児院と救貧院／御船綱手のオランダ、ノルウェー行

十二、ロシア

蠟燭一本の夜／聖イサアク大聖堂／ハリストス復活大聖堂／開放的な冬宮／アレクサンドル二世の遺品／ノーヴォエ・ヴレーミヤ新聞訪問／新聞社の印刷設備／反日

から親日へ／文化水準を示す美術館・博物館／日本の美術館の現状

十三、シベリア鉄道

シベリアと単騎遠征録／ヨーロッパとアジアの境界／線路不通の衝撃／七時間遅れでハルビンへ

十四、帰国

大阪商船の厚意／敦賀安着／萬象閣での解散式／敦賀町長の歓迎の辞／角田委員長の答辞／感謝文五箇条の要旨／会員の敦賀出発と敦賀駅の歴史／関西会員の大阪帰着／関東会員の新橋帰着／ロンドン・パリの香りとともに／ほろ酔い気分の帰着

十五、世界一周会語録

【出発】、「ハワイ・アメリカ」、「大西洋上」、「イギリス・フランス」、「イタリア」、「スイス・ドイツ」、「ロシア・シベリア鉄道」

十六、世界一周会のその後

(1) 西村天囚と懷徳堂の再興

小村寿太郎への手紙／『欧米遊覧記』の編集／重建懷徳堂の竣工／天囚が目指したもの／市民大学と図書館の誕生／「世界」とは何か／漢学者が向き合った世界

(2) 御船綱手の「欧山米水帖」

日本画壇に旋風を巻き起こした御船綱手／スケッチから

彩色画へ／季節に合わない不可解な絵／「欧山米水」とは何か／絵画の「真実」

(3) 古川俊の「衛生報告」

医師としての参加／出発からアメリカ大陸までの不調／ヨーロッパでの元氣回復／維持された健康状態と「衛生」の原義／「養生」から「衛生」へ

(4) 溝淵正気・吉村銀次郎と東京市の改革

行政関係者の参加目的／溝淵正気の談話／東京をどう改革するか／吉村銀次郎と『欧米市政小観』／市の財源となる水と電気とガス／イタリア、スイスに行かなかったのはなぜか／世界一安全で清潔な街へ

(5) 宗方小太郎の参加は諜報活動か

「支那通」宗方／鳥居素川・西村天囚への連絡／宗方と海軍軍令部／真珠湾への視線／諜報活動としての世界一周

(6) トーマス・クック社とマンテリー

マンテリーの死／トーマス・クック社の終焉

(7) 敦賀の港と駅

「裏日本」こそが日本の表玄関／人道の港／敦賀駅と北陸線／空襲と再建

十七、世界一周会の歴史的意義

文化活動としての世界旅行／第一回を踏襲した第二回世界一周会／第二回は「マンネリ」ではない／なぜ第三回

は企画されなかったのか／捨てきれない夢

【附録】

『欧米遊覧記』における外国主要地名の表記／第二回世界一周会申し込み手続き／第二回世界一周会旅程表／第二回世界一周会参加者名簿／西村天囚関係略年表／参考文献

おわりに

「地名・施設名索引」、「人名・事項索引」

(二) 本書に特別な興味を覚えた

三つの理由

では、評者はなぜ本書に特別な興味を覚えたのか。冒頭で触れた重建懷徳堂の研究における新生面の開拓も含めて、次のような三つの理由が挙げられる。

第一に、約十年前に古本屋で原書と出会うまで天囚の西洋紀行を全然知らなかった評者は、漢学者の天囚もこのような欧米巡りの大旅行をしたのかと大変感心した。

それ以前に評者は、一八九七年一二月月上旬から翌年二月初めまで天囚が神戸港発着で渡清し、上海・南京・鎮江・蕪湖・安慶・九江・武漢三鎮など揚子江沿いの都会を往復した際に著した『江漢遡迴録』を手掛かりに、「西

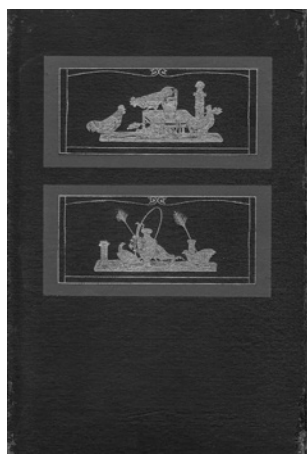


写真2 『欧米遊覧記』表紙

村天囚と張之洞の『勸学篇』(『懷徳』第六〇号、一九九一年一二月)を書いたことがある。その後、同論考を一九九八年北京大学主催の戊戌維新百周年記念シンポジウムへの参加論文として「戊戌変法前夜日本参謀本部の張之洞工作―以西村天囚《江漢遡迴録》為線索―」と改題増補して発表した。更に二〇〇七年三月、『明治の漢学者と中国―安繹・天囚・湖南の外交論策』(関西大学出版部)を上梓する際、この論文を「西村天囚と劉坤一―清末の教育改革をめぐる―」(関西大学『中国文学会紀要』第一八号、一九九七年三月)と一緒に、書中の第二章「戊戌維新前夜の『日清同盟論』―西村天囚と張之洞をめぐる―」・第三章「義和団事件前後の『支那保全論』―西村天囚と劉坤一をめぐる―」として収録した。

したがって、天囚に対して長い間、西洋と対峙する漢学者というイメージを持っていた。

もつとも、評者のこうした固定観念は、文化交流学の視角による研究を深める中で徐々に修正された。二〇一七年に出版した『日本における近代中国学の始まり―漢学の革新と同時代文化交渉』（関西大学出版部）の序説において、以下のように述べている。すなわち、明治期における漢学の地位移転も日清の文人外交官の対面交流も、「巨視的に見れば、東アジア世界の秩序と儒教的普遍主義が欧米主導の世界秩序とキリスト教的普遍主義にとつて代えられたことにより生じた様々な重要な変化の一つだったと考えられる」。後者の文人外交官（黎庶昌、矢野文雄など）の「対面交流」を可能にした「物理的な舞台もある意味で近代西洋によって提供されたものと言えよう。そもそも相手国の首都における外国使節常駐は『万国公法』にもとづき、対等条約あるいは不平等条約によって決められた制度であり、汽船による航路開通がもたらした人物往来の利便さは近代的科学技術が作り出したものであり、いずれも近代の西洋文明を抜きにして語られないものである」、「欧米主導の近代において、時空間の観念も、研究の方法論も、学問研究の制度や文化交流の舞台といった物理的装置も西洋発の影響を受けざ

るをえなかった」と。

こうした評者の所論と、本書において示されている、漢学者と西洋文明の関係に対する著者の主張とは、まさに響き合っていると言つてよからう。

第二に、評者自身、世界一周の旅を二回したことがあり、ロシア以外は、天囚らの「世界一周会」の旅程や訪問先と相当重なっている。このため、同じ名所旧跡の風景が天囚らの目にどのように映っていたかについて、大いに興味を引かれた。

評者の一回目の世界一周は、大阪大学博士後期課程在学中、一九八七年「懷徳堂記念国際シンポジウム」における同一パネルでの発表をきっかけに知り合ったテツオ・ナジタ先生（シカゴ大学東アジア研究所長）がアレンジして下さった米国七大学へのレクチャー・ツアーとその後のヨーロッパ旅行である。本ツアーは一九八八年秋にハワイ経由で渡米し、カリフォルニア大学バックレー校（Irwin Scheiner、David Keightley。敬称略、一人目は司会者。以下同様）、シカゴ大学（テツオ・ナジタ、鄒謙）、イリノイ大学（Ronald Toby、周啓栄）、コーネル大学（Victor Koschmann、酒井直樹、梅祖麟）、プリンストン大学（Marius Jansen、余英時）、コロンビア大学（Carol Gluck、Joshua Fogel）、ハーバード大学（Harold

Boitho、Ezra Vogel) などの日本研究センターあるいは東アジア研究所で「中国における日本史研究の現状」を英語で報告するものであった（途中、スタンフォード大学とイェール大学も訪問した）。ツアーの終了後、評者は更にボストンからイギリスに飛び、ロンドン大学SOASの杉原薫日本研究センター長、オクスフォード大学オリエンタル研究所のJames McMullen先生と同大訪問中の脇田晴子先生、ケンブリッジ大学中国研究所のJoseph Needham先生などを訪ねた。その後、フランス、イタリアの諸大学も見学し、最後は香港経由で帰阪した。まる二か月間の旅であった。

二回目には、二〇〇一年春から、関西大学在外研究員として欧米とアジアの諸大学（エアランゲン・ニュルンベルク大に三か月、プリンスストン大に二か月、ハーバード大に五か月余り、シンガポール国立大に一月）に滞在し、最後は香港中文大学・上海復旦大学をそれぞれ一週間訪問後に帰阪した。こちらは、まる一年間の旅であった。

こうした経験から、天囚が旅先の見聞で触発された様々な連想と文明批評、例えば、ワシントン大統領旧宅の見学時に連想された張良という漢王朝建立の立役者および西郷隆盛という明治維新の功労者（一一二―一一三頁）、ワシントン記念塔と大阪の四天王寺の塔の高さの

比較（一一五頁）、ヴェルサイユ宮殿の噴水と東本願寺の大噴水との比較（一六四―一六六頁）、水量を調節するテムズ川の閘門と淀川の洗堰や琵琶湖疏水の閘門との比較（一一五頁）、ローマのコロッセオの見学時に連想された韓非子と仁徳天皇の言葉（一八七頁）、およびサンピエトロ大聖堂と奈良の法隆寺との比較、ライン川沿岸のマインツ市にあるグーデンベルクの家を見学した際に連想された上海の黄浦江と東京の隅田川および中国、朝鮮と日本の印刷術（二三七―二四一頁）などに関する天囚の叙述から窺えたその深い教養と広い見識は、評者にとって非常に印象的である。したがって、本書を読むことは、ただ単に天囚らの旅の追体験だけでなく、評者自身の「温故知新」となるものでもあった。

第三に、本書により、日露戦争後から第一次世界大戦まで、言い換えれば懷徳堂再興運動をめぐる内外事情の文脈についてより深く理解し、より全面に把握できた。

評者は、約三年半前に発表した拙考「明治末年に現れた神仏耶三教会同と帰一協会の意義―『第二の維新』を目指す有識者たちの努力とその限界」（関西大学『東アジア文化交渉研究』第一二二号、二〇一九年三月）を、同月に出版した拙著『西教東漸と中日事情―拝礼・尊厳・信念をめぐる文化交渉』（関西大学出版部）の第七章と

して収録した（書名の本題は増田渉『西学東漸と中国事情』をもじったものだが、その中の「西教東漸」は中国キリスト教史の大家、佐伯好郎が最初使ったチームである）。同論考は一九二二年二月下旬西園寺内閣の原敬内相と床次竹二郎内務次官の主導で行った「三教（神仏耶）会同」という事実上のキリスト教「公認」の措置、および同年六月に洪沢栄一・姉崎正治らが結成した「帰一協會」という宗教間の宥和と欧米との対話の推進を目指す国際組織に着目し、その画期的な取り組みは西洋列強への仲間入りを果たした後の日本のリベラリストたちが、進化しているキリスト教文明の要素（社会保険制度の創設と社会救済事業の展開など）を摂取する新たな努力だと評価し、その目的は明治期にやり残された精神面の文明化という課題をやり直そうとすること、日露戦後に顕在化した近代産業社会に共通する社会問題に対処しようとするにあると分析している。

天囚にもリベラルな一面、開明進取の一面があったことは、著者の指摘した通りである。例えば、「もつとも、天囚の世界一周会参加とは関係なく、懷德堂の再建は既定路線だったかもしれない。ただ、市民による市民のための学校という構想は、天囚の欧米遊覧の体験と密接な関係がある。欧米諸都市の学校や美術館は、もともと

王侯貴族の創建に関わるものもあったが、市民の力によって創設・維持されていたものもあった。天囚が目指したのは、こうした市民大学ではなかったろうか」（三九二―三九三頁）、「欧米諸都市にはいずれも立派な図書館があつて市民に開放され、また先人顕彰の拠点となっていた。（中略）懷德堂の「堂」とは、人が集う広い場所のこと。その意味では、確かに講堂があればよかったのであるが、近代的な大学を標榜するのなら、研究室と図書館は不可欠であつたろう」（三九三―三九四頁）などの示唆に富んだ議論である。かく見れば、天囚が世界一周の旅行を通じて受けた啓発と影響は決して小さいものではなかった。

事実、上記拙考の副題中の「第二の維新」は、床次の用語であつた。鹿児島県出身の西郷崇拜者で中村敬宇の私塾同人社で感化を受けた床次は、「国ノ強弱ハ国民ノ品行ニ係ル」という中村の持論に賛同し、一九〇九年後半の欧米視察を通じて信念養成の重要性をより強く確信するようになり、その視察報告書『欧米小感』（至誠堂書店、一九一〇年）には次のような見聞と感想を書いている。「欧米を巡回して見ると、どこの国でも宗教が甚だ盛んで到る処に寺院の宏大なる建築物を見る。而かも其れを市街の中央に於て見るのである。人をして自から

清浄な崇高な感念を起こさしむるのである。さうしてそれと共に欧米の文明に根柢となつて居るものは、確固たる信念であらうと思う」、したがって「今日まで築き上げられた、現代の文明に、更に一段の活を入れ、第二維新の元気を引き起して、根柢強き文明を成就せねばなるまい。さうして将来国民の元気を作興し、堅実な氣風を作らうといふにはどうしても一般に信念の養成に待つより外は、致し方があるまい」と。上述の諸傾向を総合的に見れば、日露戦争後において、従来の研究で見逃されがちな「第二の維新」という西洋再学習の氣運は、当時の朝野において確かに一つの有力な潮流として存在し、しかも汽船と汽車による欧米遊覧のラッシュとなつたのである。本書中にスポーツライต์があてられた、一周会の人々が出会つた徳川家達貴族院議長のアメリカ国会図書館見学（二〇八一―一〇九頁）や尾崎行雄東京市長のパリ市政視察（四二五―四二六頁）、一周会会員の「溝淵正氣・吉村銀次郎と東京市の改革」（四一八―四二八頁、特に上下水道の建設や消防設備の改善）、および一周会決行の主な動機付けであるロンドンでの日英博覧会見学なども、その潮流のなかで位置付けられるであらう。このように評者は時代の背景と文脈を再吟味し、天因ら懷徳堂再興運動の推進者の思想的立場を再定位すべきとい

う問題意識を著者と共有しているため、本書を読む際には興味津々だったわけである。

（三）多様な「世界」への良きガイドブック

本書の「おわりに」において、著者は次のように述べている。「今回、世界一周という大きなテーマに挑戦するにあたり、古今東西さまざまな知識を必要とした。本来ならば、世界一周会の旅程に沿って欧米諸都市をめぐりたいところではあったが、それは無理なので、せめて国内関係地については取材・調査したいと思い、敦賀、倉敷、大阪、京都、横浜、東京などには足を運び、多くの機関や個人の方々から貴重なご指導をいただいた」と。实地踏査や口述史料のほかに、著者はさらに一七七点の参考書に基づいて関連の人物・事物の来歴と名所旧跡を形成する経緯を検証した。よって本書を纏める際の著者の苦心を知ることができよう。その意味において、本書は関連情報を丁寧着実に提供した「古今東西にわたる多様な世界」への案内書、とりわけ以下のような三つの世界へ招待してくれる良きガイドブックと評価できる。

第一に、「一九一〇年前後の欧米世界」へのガイドブック。

著者は「はじめに」において当時日本の国際関係を次のように捉えている。「日本の近代史の上でも、この時期は注目に値する。日清戦争、日露戦争に勝利し、大國の仲間入りを果たした日本は大いに自信を付けるが、一方では、その軍事化を危険視するアメリカやロシアで排日の運動が起こる。アメリカでは露骨に『日米戦争』を主張する国会議員もいた。そのさなか、欧米諸國をめぐった世界一周会は各地でどのような待遇を受けたのか」と。確かに日露戦争は中国の主權擁護と列國の機會均等をスローガンにかかげ、英米の支援を背景に戦つて勝利した。しかし、その後の日本は大義を捨て、滿洲鐵道を獨占的に經營しようとし、韓國併合にも動き出した。これに対して、一九〇九年に米國務長官は「滿洲鐵道中立化計畫」を提示し、イエール大学教授朝河貫一も『日本之禍機』（実業之日本社）で急激な膨張がもたらす孤立について警鐘を鳴らしている。従つて、世界一周会も自ずから民間による親善外交の使命を担い、「握手」という善意を示す西洋由来の行為により、米欧諸國との關係改善に一役を買うことになった。天囚自身がハワイハウスでタフト大統領と握手した感想を次のように述べている。

予はこの謁見の日の光景を目撃して、幾十卷の米國史を読むよりも、より深く國情を説明しているよう

に感じた。かねて聞き及んでいた國柄は、帝王の宮殿に入るようなものとはもちろん思っていなかったが、ここまで無雜作とは思ひもよらなかった。予想外の光景で、名前こそ大國の大統領閣下であるが、その儀礼の簡易卒略なること、一人の平民との會見とほとんど変わりが無い。これこそ合衆國の合衆國たるゆえんであらう。

「百聞は一見に如かず」。もしこれが「見」知だとすれば、書中にもっとも目立っている「徳川公爵の國會訪問と「日米戦争」157」と題する一節は、天囚がハワイハウス訪問直前に現地で得た最重要な「聞」知である。

聞くところによると、來遊中の貴族院議長徳川（家達）公爵も、この日、両院を參觀され、上院では昼食の饗応があつたという。最も愉快なのは下院で、議長のキャノン氏が公爵を歓迎する演説をし、公爵も答辭を述べられたところ、議事堂を動かすほどの拍手の中、キャノン議長はさらに各議員に公爵との握手を勧め、議長席にて議員たちとの握手がなされた。平生は日米戦争を説いているアラバマ州のホブソン大佐の番になって、笑い声と拍手の響きに、さしもの大堂も割れんばかりになった。ペーニン氏の發議により、公爵の答辭は議事録に特記されたそう

である。家柄といい、学識・威光・人望といい、日本紳士の典型たる公爵の両院訪問は、一個人の名譽にとどまらず、両国の議院と議院との親交に他ならず、これは国と国との非公式の共和を進めるゆえんであり、日米戦争などというたわごとは、この温かい握手の掌中に氷解するであろうことは、誠に国家人民の幸福である。(二〇八—二〇九頁)

上記の引用文は原書一五七頁からの当該段落に対する著者の現代語訳であるため、著者がアラビア数字157で示している。これは、著者が本書の特定段落から原書の該当箇所を辿りたい読者のために図った便宜であり、原書をもっている私にとっては非常に有難い工夫である。引用文後半の下線部(評者が引いたもの)は当時の天囚のコメントである。ところで、この一節に対する著者本人のコメントはさらに歴史の奥行を広げ、読者に考えさせられる内容となっている。「ここに『日米戦争』とあるのは、日本の海外進出によって、アメリカとの関係が緊張していたことを受けたものである。日系移民排斥の動きがあったことはハワイの紀行でも記されていた。(中略)しかし、日本の軍国化は次第にその速度を増し、ついに本当の『日米戦争』が訪れることを、天囚たちはまだ知らなかったのである」と(二〇九頁)。これを読ん

だ評者は、両院で盛大な歓迎を受けた徳川家達侯爵のこゝからアジア太平洋戦争中の一九四三年二月一日、蒋介石中華民国国防最高委員会委員長の夫人でいわゆる「宋氏三姉妹」中の最年少である宋美齡女史が米国議会の両院において抗日戦への支援を訴える英語の演説をし、満堂の拍手を浴びたことを連想した。この一件はある意味で、上記の議事堂における徳川公爵の厚遇と並んで、近代日中のキーパーソン(宋女史の場合、米国で中国のファーストレディとして礼遇されていた)による対米「ロビー活動」の二大成功例と言えるだろう。

いうまでもなく、本書の主目的は原書にもとづいて一九一〇年前後の欧米世界の風景と東西間の文明交渉を紹介・分析することにある。ただし、書中に倉敷市立美術館所蔵『世界周遊実写 欧山米水帖』(一九一三年、序文にあたる題辞は天囚による)という、一周会会員で大阪の画家である御船綱手が描いた風景画絵七十二枚、著者が近年竹田健二氏、池田光子氏・佐伯薫氏などと一緒に行った調査でその全容が明らかになった種子島西村家所蔵資料の一部、特に一周会の世界旅行時に記した手帳三冊の内容の一部が盛り込まれている。そのため、当事者の印象、想像、手記など新しい材料と知見が提供されたという意味において、原書より内容的にさらに豊富に

なり、またイメージ性と実証性も高まっている。

第二に、「明治「事始め」の世界」へのガイドブック。

上述のように、天囚は欧米遊覧の過程で目撃した名所古跡について、よく目に浮かぶ日本や中国の名人、名物と名所と比較を行っている。そして、現地で出会った日本の外交官や視察者、例えば、アメリカ大使の内田康哉とイタリア大使館の吉田茂書記や、欧州漫遊中の前田正名（一八五〇—一九二二）などのことも簡潔に紹介している。サンクトペテルブルク駅で到着する一周会会員を日本大使館関係者と一緒に出迎え、また大使館主催の茶話会に出席した前田について、著者は次のように詳しく紹介している。「鹿児島出身の官僚で、パリ留学、内務省御用掛、山梨県知事などを経て貴族院勅選議員。明治政府の殖産興業政策に貢献した。日本実業会会頭として全国遊説の際、『今日の急務は、国是、県是、郡是、村是を定むるにあり』と演説し、これに感動した京都府綾部出身の実業家波多野鶴吉が明治二十九年（一八九六）に創業したのが、『郡是製糸株式会社』（現在のグンゼ）である」と（二六三頁）。これはグンゼの肌着を多用している評者にとっては面白い情報だけでなく、国会開設後の国と地方の施政方針に関するコンセンサス調達の有り様が窺える手掛りでもある。そして、明治期の近代化

がもたらした新しい技術、制度と事業、例えば、旅行代理店のトマス・クック社と「JBおよび美術商の山中商会、郵便制度・出版印刷業・上下水道など都市部の産業とインフラ、および鉄道事業、特に評者にとって初耳である「欧亜国際連絡列車」（敦賀とウラジオストクの間は鳳山丸で繋ぎ、ウラジオストクとパリ・ロンドンの間はシベリア鉄道・欧州鉄道で繋ぐ）など重要事物の成立経緯をも丁寧に通っているため、本書は一周会の旅人の足跡を追いながら明治の新しい事物と風景を眺めることを可能にし、一種の「明治万華鏡」となっているとも言える。

第三に、「中国古典の世界」へのガイドブック。

本書の「はじめに」で著者は、『欧米遊覧記』は、天囚が現地から送稿した紀行を帰国後に編集したものであるが、今となつては難解な漢語がちりばめられている。古典にもとづく故事成語類も多い。何の説明もなくざらりと書かれているが、当時の読者は理解できたのであろう。その教養が偲ばれる。明治時代終わり頃の知識人の文章力、漢文力を知る手がかりとしても興味深い材料だと言えよう」と述べ、また第十七章「世界一周会の歴史的意義」においても漢学者たる天囚の「新鮮な感性と達意の名文」を褒めている（八頁、四五—一頁）。ここにい

う達意の美文とはすなわち漢文調の紀行のことである。天因だけでなく、紀行の一部を分担執筆した告天子（岡野養之助）と北江（佐藤真一）の報道を読めば、その文章力と漢学の素養もよく分かるのである。そして、会員中の数名が『ポケット論語』、天因自身は『袖珍五経白文』を携行していることも紹介されている（三五六頁）。まさに齋藤希史氏が『漢文脈と近代日本―もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、二〇〇七年）で指摘したように、漢文は言文一致以降も日本文化の基盤として生き続け、思考様式や感覚を含めた知的世界の一部を表出する役割を果たしていた。

ただ、その漢文調の紀行を今日の読者、特に若者にとつて分かりやすい内容にするためには、著者がなされたような現代語訳の作業が不可欠であり、せめて紀行における漢文由来の故事成語の典故や含意を突き止めることが必要である。著者はこれまで諸子百家関係の本や、『杞憂』『出藍の誉れ』『塞翁が馬』など日本語化された熟語を『芸文類聚』『太平御覧』など中国の百科事典たる「類書」でその語源を辿るという創意で書かれた『故事成語の誕生と変容』などを多数出版した。直近でも『教養としての中国古典』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）、『中国思想基本用語集』（ミネルヴァ書房、二〇二〇年）および『儒

教の名句…『四書句辨』を読み解く』（上・下二巻、汲古書院、二〇二〇年・二〇二二年）などを続刊している。従って、現代語訳と故事成語の典故の特定は著者にとって十分適任で楽しく成し遂げられる仕事だったのである。例えば、告天子が「ナポリの夕暮」において、旅行案内書における「ナポリは形勝の美蓋し欧州に求むるにコンスタンティノーブル（東ローマ帝国の首都、現在のイスタンブール）を除いては他に比類なし、伊太利人はナポリを朝に見れば夕に死すとも可なり」（原書三五六頁）という記載を紹介している。いうまでもなく、この旅行案内書の作成者自身もおそらく漢学の素養があつたからこそ、このよう漢語風の文言でナポリに関するイタリア人の感覚を表現したのでろう。告天子の引用文を観た著者は、『朝に見れば』云々は、もちろん『論語』に見える孔子の言葉『朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり』を踏まえている」と素早く断定し、その古典専門家の本領を発揮している（二〇八頁）。なお、第一章「出発まで」・第二章「出航」から第十四章「帰国」までという旅程順を反映する主体部分の続きで、わざわざ第十五章「世界一周会語録」も設けられ、原書中の八か所の面白い文言と事柄を逐一に解説し、その長さはなんと七三頁にわたっている。その意味で、本書は世界一周の旅程に点

在する名所を辿りながら、「中国古典の世界」に深入りする好適なガイドブックと言ってけっして過言ではなからう。

(四) 天囚の思想的性格と懷德堂再興運動の時代背景に関する再考

天囚における思想形成と漢学・儒教道德復興論を時代順に追って論じた力作として、梅溪昇先生の「懷德堂と西村時彦（天囚）」が挙げられる。その中で、青年期の代表作『屑屋の籠』を例に、「天囚がそこにおいて固陋な封建的保守主義ないし反近代主義に立っていないかったことは自由民権運動や洋学の否定が見られないことにおいても知りうるものである」と指摘されている。また文中の第三節「明治末期の天囚の思想と懷德堂研究」において、『日本宋学史』や『懷德堂考』などの著述を挙げると同時に、一周会の後に起きた「大逆事件」と「南北朝正閏問題」に対する天囚の反応にも触れられている。すなわち前者について、社会主義者の堺利彦が日本全国の逆徒の遺族を弔問する旅に出た際、ついでお世話になったことで敬慕している知人の天囚を大阪朝日新聞社で訪ねようとしたが、天囚に「私情のために公義を捨て

ず」と言って面会を断られたため、堺の同志である荒畑寒村によりその『堺利彦伝』で「非常な忠君愛国主義者」と評されたというを紹介している。後者については、「天囚は教育勅語に拠り儒教的国家主義の立場に立って儒教道德の復興運動につとめた。しかし天囚がそのころの偏狭な皇室中心主義的な国体論に対して決して同調していなかったことは、『朱子学派の史学』と題する明治四十四年七月の講演（『朝日講演集』第一）において朱子学派の史学の長短を論じて南北朝問題に及び、朱子学派が史論に偏して史実の吟味に疎く、従ってその結果として史論もまた偏頗となって公平を欠くに至ったことを述べ、『其余弊は近日の南北朝問題でも知られる。南朝を以て正統と致すのは宜しいが、当時南朝の外に北朝があったと云ふ史実は明白にして蔽ふべからざるものである。史論を以て史実を打消すと云ふ事は宜しくない』と批判していることによって明らかである」と論じている（梅溪『大阪学問史の周辺』、一七〇—一七四頁）。

梅溪先生の論文に影響を受けた評者は、「西村天囚と劉坤一——清末の教育改革をめぐる」という論考で次のように述べたことがある。「西村にはまた儒教文明の存続という強烈な動機もあり、それが彼の清国新教育促進論を異色なものにしたのである。すなわち西村は、日本

化した近代西洋の教育制度や理念を中国に勧める際に、明治日本の抱えている精神教育の問題およびその解決のために作られた（西村にしてみれば）儒教主義的『教育勅語』も紹介した。このような西村の問題意識は、彼の一貫した著述活動や社会活動を見ても、明らかに becoming している。すなわち一八九九年、西村が『上文部大臣請復昌平学書』という建白書を作成し、徳川時代の最高学府である江戸昌平黉の再興によって儒教的道徳文化の保存や発揚を図ろうとしたことがあった。また留学後の二十年間、『日本宋学史』など一連の書物を作り、懷徳堂の復活に献身的努力を払い成功を収めたのであった」と（『明治の漢学者と中国』所収、一二七―一二八頁）。

しかし、梅溪先生の所論も私の所論も、『欧米遊覧記』という天囚の西洋紀行を知らない段階で行った論述であつたため、明治末期における天囚思想の全体像を把握する上でのバランスの取れた所論とは言えない。これに対して、著者は原書を取り上げ、本格的な解析を行ない、特にアメリカとイギリスの周遊を終えた際の天囚の英米比較論に着目している。それは、「米国にては、日に日に新なる事物を見て、活動邁往（活動的で意気盛ん）の氣象に触れ、たちまち大海を越えて英国に入るや、歴史尊重、国粹保存の風に鑑みて、ますます二千五百七十年

の神州のありがたさをも知った。ただいかに古いのがよいとは言っても、停滞躊躇して世界の進運に伴わなければ、あるいは人後に落ちるであろうことを恐れて、さらに米国での足跡を回想してみれば、米国で気づかなかつた長所で、かえって今になってそれと気づくものもある。さらに大陸諸国の各都府を歴遊して、長短を比較し、棄



写真3 世界一周会イギリスにて、後列左から2番目が西村天囚

てるべきを棄てて学ぶべきを学ぶのは、それぞれの人にあるが、ただこの上なく嬉しかったのは、ロンドンにおいて、一年中での最もよい季節に、我ら一行の足跡を印せたことである」(一五六頁)という進取の精神がこもった論述である。

これをふまえた著者の天囚評価は、次のようなバランスの取れたものであるがゆえに、説得力の高いものとなった。「こうした伝統重視、懐古の立場の漢学者が先進的文明と対峙した時、一般論として、まず次のような反応が予想される。それは、生理的な嫌悪感である。古き良きものを壊すところに成立する近代文明は到底受容できないという感覚である。また、そこに国粹主義的な思想が加われば、西洋の人や物を排除しようとする「排外」の姿勢となるであろう。しかし天囚は違っていた。中国の古典を尊重しながらも、西洋近代文明に謙虚に接し、その良い点は高く評価し、また日本の良さも再発見している。懐古に固執することのない冷静な観察眼があったと言える」と(二九八頁)。

振り返ってみれば、懷德堂の顕彰再興運動の置かれた明治末期と大正期は様々な動向が錯綜している激動の時代であった。上記で言及した一九一〇年の「大逆事件」一九一一年に政治問題化された「南北朝正閏問題」およ

び一九一二年の三教会同と帰一協会の成立があり、言及しなかった一九〇八年の「戊申詔書」もある。そして、近代日本の国民道德涵養に関する三大詔書中の他の二つとして、一八九〇年の「教育に関する勅語」と一九二三年の「国民精神作興の詔書」もある。後者は関東大震災の二か月後に発布されたものであるが、天囚が撰文に尽瘁した。後醍醐院良正によれば、天囚は震災後に良正の父盧山あての書翰に、「今回の大地震は前代未聞、災後の状目もあてられず。(中略)爾後は日本国の立直しに御座候。享樂主義も恋愛至上主義も社会主義も粉碎して純然たる日本主義の下に世界列強と協調して人類の平和にを驀進する外無之候」と書いたが、詔書起草時、「文藻豊かな天囚も、全智を傾倒して想を練り、その草稿には朱を入れては書き改め、また朱筆を入れ、かように繰りかえすこと数十回におよび、文字通り寝食を忘れる辛苦を重ねた」という(後醍醐院良正『西村天囚伝』下巻、四三七―四三八頁)。

「戊申詔書」が発布されたのは一九〇八年の秋である。同年の夏、中井木菟麻呂が嵯庵・竹山・蕉園への贈位を期待して、重野安繹を訪ね、大阪における三祖祭典の公開挙行への支持を求めた。結果、重野に依頼された天囚はその協力を木菟麻呂に約束した(この前後の事情につ

いて、竹田健二『市民大学の誕生—大坂学問所懷徳堂の再興』に詳しいので、参照されたい。その意味において、一九〇八年は懷徳堂顕彰運動の元年とも言える。著者は原書を紐解く際に、「このような懷徳堂顕彰運動の間に天因が参加した「世界一周会」とは、どのような意義を持っていたのであるのか」という鋭い問題意識をもち、様々な角度から検証作業を行い、本書のような示唆に富んだ研究成果が挙げられた。これにより、西村天因と重建懷徳堂の研究における新生面が開かれ、その歴史的位置づけを考え直す貴重な手掛かりを与えてくれたのである。

(五) 小村寿太郎、宗方小太郎 および濤貝勲について

著者は「明治時代における世界旅行」という全体像の中に西村ら「世界一周会」を位置づけるために、明治初期の岩倉視察団、一九〇九年秋冬の約三か月間で五十三都市を訪問した渋沢栄一が率いる渡米実業団などに触れ、前者については「不平等条約の改正を目指したものであったが、同時に先進国のインフラや諸制度を学ぶという大きな目的もあった」と指摘している（六一―七頁）。

事実、小村寿太郎の「日英博覧会」開催案も不平等条約の改正を含む「一石二鳥」の効果を狙っていた。すなわち一九〇八年七月の内閣交代で西園寺内閣派遣の駐英大使から桂内閣の外務大臣となった小村が、九月に提出した外交方針に関する意見書のなかで、「平和ノ維持ト国力之發展」という「二大目的」を達成するために、列国との関係改善、対外経営と条約改正の三点に力を入れ、来るべき一九一〇年の条約交渉を通じて改正日英通商条約を締結することにより「税権全ク我ニ帰シ、帝國維新以來ノ宏謨タル国権ノ回復ハ茲ニ初メテ其完キヲ告グルニ至ラム」という悲願を表明した。翌月の閣議決定がこの方針を承認し、「日英両国之民間ノ親睦ヲ事実的ニ表彰スルハ、両国国交上必要ナル所ニシテ、日英博覧会ノ開催ノ如キハ右ノ目的を達スル爲最適当ノ方法ト認ムル」こととした（河村一夫「明治四十三年開催の日英博覧会について（中）」『政治経済史学』第一八六号）。

一九八五年春復旦大学大学院で「幕末明治初期の日英関係」と題する修論（中国語）を完成した評者は、近代日中両国の条約改正史にずっと関心をもっており、最近出版した『平山省斎と岩瀬忠震—開国初期の海外事情探索者たち（Ⅱ）』（関西大学出版部、二〇一八年）において日本側筆頭委員の岩瀬がイギリスのエルギン伯爵と調

印した日英修好通商条約の交渉過程を再検討した。すなわち日本の対英条約改正は、日清戦争直前の治外法権撤廃、辛亥革命にあたる一九一一年の関税自主権の回復および一九二〇年代前半におけるマイナー事項の最終妥結という難渋な三段階を経過し、半世紀余りの歳月が費やされた。実利を重視し対日貿易の特権を堅持する同盟国英国のしたたかな外交の一面が窺えるのである。従って、日英博覧会の開催による条約改正交渉の環境整備と税権回復の最終実現は、岩倉視察団以降に積み重ねられた努力により獲得した最大成果であったに違いない。

以上のような文脈で一九一〇年一月四日付け朝日新聞の社告として公表された第二回世界一周会の「趣旨」を改めて読むと、大変興味深く感じた。今年五月倫敦における日英博覧会の開催により「両國國民の接觸を圖り、民、民と識り、國、國と相近づき、以て國家の日英同盟をして更に國民の日英同盟たらしめんとする意に外ならず。この點より推して今回の博覧會は一種政治的の意味を含めりと言ふも妨げず、されば折角の此盛舉をして豫期の効果を擧げしめんには勉めて邦人の之に赴いて親しく英人と相接せんことを促さざるべからず、博覽會館裏、唯歐人の來觀に任せて邦人の影を見ざるが如きは、博覽會本來の趣旨に副ふものと言ふべからず。我社が天下に

先つて世界一周の博覽會見物隊を組織せんとするもの亦此の邊の慮りより來る」と（原書第五頁）。その中の最後の一行を見れば、「博覽會見物」が主目的であり、「世界一周」はあくまでも付帶的旅程と強調されているようである。文面にこそ出ていないが、行間に伏在している条約改正への地ならしという意味合いと含みについては、せめて一周会の委員長を務め「東京市区改正局長、大日本博覽會理事官」の肩書をもつベテラン政治家で俳人でもあった角田真平（一八五七—一九一九）や「世界一周会の長旅を終えて大阪に帰った」日の「翌々日の七月二十一日付けで小村寿太郎に書簡を送っている」天因などが知っていた可能性があるだろうと思われる（三八七頁）。

著者はまた「世界一周会の中でも異色の存在」として「東洋協會幹事、東亞同文會評議員」の肩書をもつ宗方小太郎を取り上げ、海軍軍令部が支給の「欧米漫遊の補助金」を受けたこと、ハワイでの日記に「フィリピンから真珠湾に移設してきた海軍基地の様子」を詳細に記録したこと、および海軍の上奏を受けた外務大臣の総理大臣宛の宗方の叙位・叙勲申請書に添えた履歷書に「明治四十三年、欧米各国歴遊ス」という記載などを突き止めたため、彼の一周会参加は諜報活動のためではないかと

推測した(四二八―四三五頁)。鋭い観察だと考えられる。

そして、一周会会員を載せた地洋丸に、横浜港からサンフランシスコまで同行し、船上で天囚ら一周会の代表を接見した清国皇族の濤貝勒(一八八七―一九七〇)もいた。著者はその「姓は愛新覺羅、通称は載濤。清の道光帝の孫で、愛新覺羅溥儀の叔父にあたる。日本、ヨーロッパ、アメリカなどを巡る軍事考察団として、日本からアメリカに渡るところであった」と紹介している。事実、濤貝勒が外遊前の一九〇九年が、日本様式の屋敷を北京に建てたため、駐清公使の伊集院彦吉(一九〇八年六月着任)に名付けることを頼んだことがあった。伊集院は「後楽亭」と名付けた後、外務省を通じて重野安繹(一八二八―一九一〇)にその由緒に関する「記」の作成を依頼した。重野は「後楽亭記」において、古代日本は天竺、中国および朝鮮の寺院・宮殿・楼閣の様式を学んだことや、徳川光圀に招聘された朱舜水が水戸藩の江戸藩邸を後樂園と名付けたことなどに触れた後、一九〇七年に帝国学士院の代表としてウィーンで開催された第三回万国学士院聯合会総会出席を機に約半年間の欧州遊歴をし、帰り道にシベリア鉄道を経て中国に入り、北京で那桐外務大臣に、武昌で張之洞湖広総督に会見したことを述べた。そして、今後の清国再訪の機会でぜひ「後

楽亭」を観覧したいという期待を表した。しかし、重野は一九一〇年二月六日に逝去したため、再訪が実際に実現できなかった(前掲『明治の漢学者と中国』、五六頁)。

考えてみれば、天囚の進取精神は師匠譲りの部分もあったと言えるかもしれない。重野は幕末に「開国攘夷」論を唱えたため、排外浪士に尾行されたことがあり、内閣修史館や帝大史学科に務める際はゼルフィーヤリスなどの近代西洋史学の方法論を導入した。そして、八十歳の時に宿願を果たすために上記の欧州遊歴を決行したが、その時に同伴した長男の紹一郎が留学経歴のあった東京外国語学校のフランス語教師であり、父の外遊を助けるために一時休職の措置を取ったことも挙げられる(因みに、重野父子が奉天到着の時に、天囚は前に触れた岡野告天子と一緒に出迎えた。重野より十歳年下の張之洞が「清国翰林院宜しく万国聯合会に加盟し、声息を通じて風氣を開くべき」との重野の建議に賛意を表した一幕を天囚も武昌の現場で目撃していた。『明治の漢学者と中国』五七頁)。しかし、その進取精神の端的発露はなんともいってもまず、岩倉使節団の副使大久保利通に贈った「送大久保参議赴欧米諸国」と題し、明治天皇「五か条の御誓文」の精神を敷衍し、多元主義の文明観をも示した次の漢詩(五絶二首)と言えるだろう。

奉勅航海外。此行豈徒為。達觀五洲美。言旋建皇基。政俗無夷夏。時運有盛衰。定知歸獻物。不敢及珍奇。その背景は次のような事情があった。すわなち岩倉使節団の結団当時、最初内定された随行書記は重野であった。しかし、重野が大阪で私塾「成達書院」を運営していたので、囲碁の友でもある大久保の要請に応じられなかったため、急遽彼より十二歳年少の久米邦武が選ばれた（『明治の漢学者と中国』三二頁）。もし、この人選変更がなかったら、『特命全權大使 米欧回覧実記』は久米ではなく、重野の手により編纂されたのかもしれない。

後記

本稿を作成する際、一九八〇年代後半、大阪大学大学院博士後期課程在学中に大変お世話になった諸先生、すなわち脇田修（一九三一—二〇一八）先生と夫人・脇田晴子（一九三四—二〇一六）先生、子安宣邦先生、梅溪昇（一九二一—二〇一六）先生、テツオ・ナジタ（一九三六—二〇二二）先生の学恩を思いつつ、執筆を進めました。今年三月末日をもって奉職二十六年の関西大学を定年退職したこともあり、思わず過去への郷愁を交えて書いてしまったために、文章が冗長になりました。申し訳ございません。

阪大在学の初期は、シカゴ大学東アジア研究所所長の

ナジタ先生もちょうど阪大を長期訪問中で、脇田先生、特にナジタ先生の著書 *Visions of virtue in Tokugawa Japan: the Kaiokudō, merchant academy of Osaka*（邦訳『懷徳堂——18世紀日本の「徳」の諸相』）を監訳している子安先生がよく交流の場を設けて下さいました。そのため、脇田・子安両先生のゼミに出ていた私は、ナジタ先生に会う多くの機会に恵まれ、先生のご研究に資する並河寒泉『弁解』という、懷徳堂の無鬼論の系譜を理解する上で有益な文献も提供しました。お蔭様で（先生が阪大にいたため、実際各大学との事前連絡と日程調整をして下さったのは、先生から依頼された李歐梵（Leo Ou-fan Lee）代理所長という著名な魯迅と中国現代文学の研究者）成し遂げた米国七大学へのレクチャー・ツアー時の写真と録音、およびイギリス三大学を訪ねた際の写真も保存しており、貴重な思い出となっています。そのうちの一枚はケンブリッジ大の中国科学史の大家、ジョセフ・ニードム先生に私の日本語処女作『荻生徂徠の『楽書』考証とその所産（『待兼山論叢』第二十一号・史学編、一九八七年十二月）を献呈後にその夫人魯桂珍女史が撮って下さったものである。ナジタ先生の平成元年度山片蟠桃賞授賞式に出席時の記念写真もあり、先生逝去時に追悼記念文と遺影を募集された時、この一枚を、一九

八八年九月一六日ナジタ先生がご自宅で私の初来訪を歓迎するために開いて下さったパーティーで撮らせていただいた一枚（先生と尊夫人が私の中国知人の大書した二文字「龍虎」の掛け軸の両側に立っていらっしゃるお姿）と一緒にシカゴ大学東アジア研究センター（もとの研究所はのちにセンターと改名されたようである）に送付しました。幸いに、この二枚の写真と拙文とともに下記のオンライン記念サイトに採用されました。<https://cas.uchicago.edu/content/memorian-professor-tetsuo-najita-1936-2021>

脇田先生、梅溪先生およびナジタ先生には、その最晩年にまで時折訪ねたり、挨拶状や拙著を送っていました。いまや、このお三方の先生および脇田晴子先生がお亡くなりになりました。ここにおいて謹んでご冥福をお祈りします。

なお、湯浅先生が引用した『評伝宗方小太郎―大陸浪人の歴史的役割―』（熊本出版文化会館、一九九七年）の著者で法政大学政治学博士の馮正宝氏は、一九八〇年代初期、徐家滙にある上海図書館蔵書樓に隣接する上海社会科学歴史研究所の助手を勤めた際の同僚でした。当時、馮さんとその上司、呉繩海先生（一九三四年京都帝国大学文学部東洋史学専攻卒業生）と一緒に同研究所

所蔵の「宗方小太郎文書」（中国残留分）を整理翻訳していました。私は所属の研究部署は馮さんとは違いますが、辛亥革命七十周年記念事業のために関連の日本語書誌から抄訳して「日本における辛亥革命研究の現状」という小文を纏めていました。お互いの研究室が近かったので、時折馮さんの訳文に関する討議に参加し、休憩時に研究所ビルの屋上で太極拳を教えてもらったこともありました。入所早々の一九八〇年夏、四歳年上の馮さんと一緒に呉先生の（ご自宅を訪問した時、西瓜をご馳走になり、



写真4 ケンブリッジ大学のニーダム先生に『待兼山論叢』における拙文を献呈



写真5 テツオ・ナジタ先生の山片蟠桃賞受賞式にて

その三高時代の思ひ出話を聴かされました。とにかく課業負担が重く、試験時に手が震えていた様子を夢に見ることがあったとおっしゃっていました。三人が広いお庭で歓談した当時の光景は今でも覚えています。長い間、馮さんと連絡を取っていなかったが、最近になって、あんなに元気で拳法も上手だった馮さんが昨年十二月に逝去されたことを知り、ショックを受けました。この場を借りてご冥福をお祈りいたします。

二〇二三年十一月十日定稿